

實に慶應二年九月にして、望東がこの鳥獄に幽せられしより、凡そ一年に近かりき。晋作自ら出でて、望東を迎へ、その手を執りて、舊恩の渥さを謝し、辛酸の甚しかりしを慰めしが、尼も亦悲喜こもく至りて、殆ど言ふところを知らざりき。

かくすればかくなるものと知りながら止むに止まれぬ大和魂

吉田松隆

ローランド夫人の傳(ついで)

鄭越生補譯

斯くて夫人はかもへらく、我幸にまのあたり、身に迫りつる厄難を、免れたれど一滴の、温き血漿も一點の、涙もあらぬ蛇か鬼か、人の情もひとして、絶へて知らざるのみならず、理否の差別も白すぎの、直き心の忠良を、國賊といひ亂倫を、

人の自由とかもひなし、白を黒とし後をは、前とし狂ひ狂ひたる、敵黨輩のことなれば、いつといふ時の定めなく、又何といふ冤罪を、云ひ構へて訊鞠し、竟には非道の罪名に、陥れんも知れされば、やがて時運の回歸して、敵の眠りの覺めたらん、時機をば待ちて徐に、此大抱負を實行し、世の人々を濟はんかな、此身一つは數ならず、露おしどにはあらねども、道のためなり世のために、しばしなりともながらへん、左なりくど是よりは、門の守衛を嚴にして、世の趨勢を一向に、觀望してぞありたりける。

さるほどに、山嶽黨の人々は、心ならずもひとたびは、夫人を釋放したれども、彼等夫妻とそのまゝに、のこしかかはんは猶虎を、山野に放くに異ならず、どにもかくにもからめどり、陥れんに若

くはあらず、今日(けふ)は打手(うちて)をさしむけん、明日(あす)は獄舎(ごくしゃ)につなぐんと、評議(へうぎ)怠り(た)なしとかや、風聞(ふうもん)頻り(ひん)なりければ、夫人(ふじん)夫妻(ふうさい)は警戒(けいがい)に、いと心(こころ)をくばりつゝ、三日(か)四日(か)どすぎつるに、四月(よ)三十日(じゅう)の夕(ゆふ)つかた、五時(ご)三分(さん)捕吏(とらひ)六人(むに)人、改革(かへく)委員(くわい)の命(めい)なりど、權威(けんゐ)を肩(かた)に闖入(ちやんにゅう)し、ローランド(らうらんと)氏(し)を縛(はく)せんと、舞(ま)さけるが道(みち)ならぬ、曲事(まがこと)なりと一言(いちごん)の、その抗辨(かうべん)にこそ〜と、返(かへ)す言葉(ことば)も梨子(なし)の實(み)の、何(なん)の返酬(へんじゅう)もあらずして、おのがひさ〜まかりけり、此(この)時(とき)夫人(ふじん)病床(びんしょう)に、引(ひ)きこもられて在(あ)りけるが、良人(りやうじん)の大事(だいじ)眼前(がんぜん)に、迫(せま)り來(きた)れり默然(もくねん)と、看過(かんくわ)すべきにあらざれば、立法院(りつぽういん)に出廷(しゅつてい)し、この道理(だうり)を争(あら)せて、ともかくもの運命(うんめい)を、決(けつ)せんものと病体(びやうたい)を、身(み)がるによそひて門(かど)を出(い)づ、あはれ危(あや)し哉(や)、危(あや)しきことに近く(ちかづ)は、君子(くんし)のすべきことならず、まして

四十六
夫人(ふじん)は女性(にょせい)なり、その意氣(いき)や豪(ごう)ますらをの、鬚髯(しゆぜん)男子(なんし)にまざるとも、女性(にょせい)は流石(りやうせき)女性(にょせい)なり、鼻(はな)々(々)き女性(にょせい)の身(み)を持ち(も)ちて、この冒險(ぼうけん)を敢(あ)てせんとす、あはれ危(あや)しかな、とは云(い)ふものゝ、又(また)と他に(た)に、現下(げんか)の急潮(きゅうしゅう)救(きう)ふべき、方便(ほうべん)なきを奈何(いか)にせん、かくて夫人(ふじん)はいくたびも、敵(てき)の誰呵(たつか)をくゞりつゝ、チユイレリー宮(きやう)につきたれども、かなしきかな、宮門鎖(きやうもんさ)して入(い)るを得(え)ず、論(ろん)せんとして論(ろん)するの、道(みち)もなぐまた訴(うた)へん、ことしもならず滿腔(まんかう)の、不平(ふへい)鬱勃(うよく)快(た)くとして、歸(かへ)られけるがこゝにまた、夫(ふう)ローランド(らうらんと)はおもふやう、かくてあらんには捕拿(とく)の、再(た)りて理(り)否(ひ)もなく、からめどらんにかめ〜と、敵(てき)の毒牙(どくが)にかけられて、大政黨(だいていとう)の首領(しゆりやう)ども、云(い)はるゝ此身(このみ)冤罪(えんざい)に、キロチン臺(たい)の朝露(あさつゆ)と、消(き)へんもくやしおちのびて、時(とき)の來(きた)るを待(まち)つべしと、さる黨(とう)

人の隱宅に、すがたをかくしたりければ、夫人は
 この顛末を、良人に告げて後々の、事を處せん
 と筆を執り、未だ一行を行らざるに、捕吏三人ど
 か〜と、夫人の室に入り來り、ローランド氏の
 行先を、訊問たれども夫人には、斷々として隱匿
 所を、告げざりければ後にまた、爲んやうありと
 そこ〜に、歸りざりたりさる中に、事由こまこ
 まど夫人には、寄書を認め侍婢に、命じて翌くる
 朝早く、良人のもどに送るやう、こと遺漏もなく
 爲しはて、夕食をすましゆる〜と、ふしどにこ
 そは入りたりけれ、
 嗚呼夫人は實に沈着なりしなり、
 嗚呼夫人は實に大膽なりしなり、
 なべての婦人よ省みよ、事といふへき事もなき
 平生の時には沈着の、風を裝ひあるは又、大膽様

にふるまへど、いざ時といふ時となれば、いざ事
 といふ事となれば、笑止なるかな平生の、沈着は
 又大膽は、何地行けん手も顛ひ、足も戦き顔色蒼
 白、唇紫黒氣も喪せて、唯舉措も泣くばかり、小
 膽豆粒の如くなる、なべての婦人よ省みよ

如何に夫人は沈着なりしかよ、

如何に夫人は大膽なりしかよ

かくて一時すぎけんど、覺ほえしころ夫人をば
 國事違犯の嫌疑もて、拘引すべきことの上し、立
 法院の令狀に、有無を云はせず捕縛せん、我や先
 にと捕拿の、踏入りければ夫人には心おちつけか
 しこみて、命を奉ぜん左りながら、家の私事の辨
 すべき、事件の多かりしばらくの、猶豫たまへや
 すでにして、夜もやうやうと明けの鐘、ノートル
 ダムの木の間より、般々として鳴り渡り、巴里八

八百八街の、曉知らぬ暖さ、春の朝の夢さます、頃
 ともなればいざ行かん、心安かり左はいへど、告
 げずて我の去りもせば、後にのこりしいとし子の
 やがて目覺めん其の時に、無情の人と此母を、如
 何にくやくしくおもふらん、事の顛末を打ち明けて
 得心さして別れんと、心を決して夫人には、いま
 此母は敵黨の、嫌疑をうけて綫繼の、いまはしき
 身とはなりつれど、疑晴れて白日の、樂しきとき
 も來んほどに、心雄々しく待てよかし、とはいへ
 もしや此母が、敵の毒手にかゝるとも、そは天命
 とあきらめよ、國のためまた民のため、世の辛酸
 を嘗めつくす、父の精神を精神とし、自由の敵と
 たゝかひし、母の誠をうけつぎて、天晴堅固の婦
 人となれ、云ふべきことは之れまでと、たゝんと
 せしが生憎や、生別離の苦恩愛の、情にさすが女

四十八
 丈夫も、煩惱の母に立ちかへり、しばし涙にくれ
 けるが、時もうつれりどくくど、警吏の人にう
 ながされ、夫人はいざと泣きむせぶ、哀しき人を
 後にして、心づよくも出でにけり、こゝに檻車の
 之くどころ、世にも名高き女英雄の、末路に名殘
 惜みてや、街衢は人の堵をなせど、寥然としてさ
 ゝやさの、聲もきこへず、さこふるは、軋々とし
 て轆る音、瀟々として唧唧音、
 その唧唧音や車を廻りて長く、その軋る音や悲
 みを曳きて重し。
 (未完)

